

佳作

忘れられない夏

愛媛県 済美高等学校一年 土釜 凜香

最後まで諦めない一塁へのヘッドスライディング。その横を走り、仲間のもとへ向かう相手チーム。スタンドは拍手の嵐に包まれていた。

「私チアをやる。」
と、なんの迷いもなく母に言った。高校に入って初めての期末テストがチアの練習期間中にあることはもうわかっていた。チアをやるためならば、勉強も頑張れると思ったのだ。もちろん、こう思うのには理由があった。小さい頃、野球のルールすらわからなかった私の心に突き刺さったのは、テレビに映る高校球児の姿だった。最後まで諦めずボールを追いかけて、仲間を信じて声をかけ続ける。その姿は小さかった私にとっても、今の私にとっても、非常に印象的なものである。しかし、それだけではない。スタンドで、野球部の保護者の方々や生徒やチアをしている人たち、そして会場にいる人すべてが声援を送っているところが私の目に飛び込んできた。応援は人にたくさんの勇気を与え、誰かを一步前に押し出すこ

とができる。

少し長くなってしまったが「応援の力」こそがチアをやると決めた理由である。

練習と勉強の両立は決して簡単ではなかった。だが、それは他の人たちも同じだ。何より、これから始まる暑い夏に向けて練習に励んでいる人たちがいる。そう考えたら、いつのまにか、一步、また一步と私の足は前に進んでいた。

だんだんと近づいてくる地方大会。練習も追い込みに入っていた。チアをする上で一番大切なのは「笑顔」である。最初は顔がこわばって相手に届くような応援には程遠い状態だったかもしれない。そんな時、

「まずは、自分たちが応援を楽しみなさい。」
と先生がおっしゃった。私の中で何かが弾けた気がした。ただただ踊っているだけではない。自分たちが楽しまなければ、いつまで経っても気持ちが届かないだけではなく、見ている人たちにも応援の素晴らしさは伝わらないのだ。

ついに始まった地方大会。私の胸は高鳴っていた。一番最初の声の大きさが一番大切であると言われていたため、必死に声を出した。一勝目を勝ち取った。「まだまだいける」。そう思った。一戦一戦粘りのプレイで勝ち進んでいく済美高校。その勢いはおさまることを知らなかった。同じシード校が惜しくも破れていく中、準決勝、

そして決勝へと駒を進めた。だんだんと生徒の一体感が増しているような感じがした。決勝ではホームラン二本を出し、見事に念願であった甲子園への切符を掴んだ。決勝での一体感は、両校ともに息をのむほどだった。「夢の舞台ではどんな試合を見せてくれるのだろうか」と、皆期待を膨らませていた。

暑い日差しが照りつける中、いよいよ夢の舞台、甲子園が幕を開けた。済美高校の初戦は、開幕初日の二試合目だった。甲子園でチアができるという喜びとハラハラドキドキした気持ちが入り混じっていた。一回が始まってから試合が終わるまでは本当にあつというまだった。結果は勝利。昨年のベスト十六を越える、という強い気持ちを感じる試合だった。それから済美はますます勢いを増していった。特に印象に残っているのは、二試合目の大逆転劇、その十三回裏で放った史上初の逆転サヨナラ満塁ホームランである。目の前がぼやぼやしてきて、気づけば涙が溢れていた。その日は外すことのできない用事があり、画面を通しての応援だった。球場で応援できなかったという悔しさはあったが、次に進める喜びも込み上げていた。

歴史的な激闘を繰り広げ、昨年のベスト十六を越え、迎えた準決勝。相手は春夏連覇を狙う大阪桐蔭高校。試合は途中苦しい展開になった。それでも、プレイしている選手にもスタンドで応援している私たちにも諦めはな

かった。九回の表、最後の攻撃が回ってきた。最後まで諦めない一塁へのヘッドスライディング。その横を走り、仲間のもとへ向かう相手チーム。スタンドは拍手の嵐に包まれていた。五―二で破れたものの、その姿は敗者でも弱者でもなかった。私たちに感動と喜びを与えてくれた勇者だった。

ヒットが出ると皆で喜び、夢の舞台で何度も踊ることができたこと、そしてたくさんの感動を与えてくれた選手たち。この長い夏を一生忘れることはないだろう。チアをして本当に良かったと、心の底から思った。